

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第9回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成29年2月10日

| | | | |
|-------|---------------------|-----|---------------|
| 視察児童館 | 世田谷区立代田児童館(東京都世田谷区) | 視察日 | 平成28年9月30日(金) |
|-------|---------------------|-----|---------------|

| | | | |
|---------|-----------|--------|------|
| 視察実施委員等 | 羽崎委員 吉村委員 | 報告書作成者 | 羽崎委員 |
|---------|-----------|--------|------|

| | |
|--------|----------------|
| プログラム名 | 世田谷区子ども夢プロジェクト |
|--------|----------------|

視察日に行われたこと

世田谷区子ども夢プロジェクトを実施するための拡大事務局会議

視察実施に関する所見

- ① 今回のモデル事業である「子ども夢プロジェクト」を実施するための拡大会議に参加。
- ② 二部に分かれており前半は事務局のスタッフにより「各児童館の活動状況」「計画発表会の反省」「活動報告発表会(平成29年1月22日)について」などが報告、議論された。
- ③ 後半は参加各児童館の担当者が集まり、事務局から前半で話された内容が説明され、それについて議論した。
- ④ 全体を統括しているのが世田谷区子ども・若者部児童課の職員で、すでに、進んでいるプログラムでもあり、日頃からコミュニケーションをとっている様子がうかがえ、議題に関してもスムーズに進められていた。
- ⑤ 全体の統括を児童館に任せることも一つの方策であるが8つの児童館が参加したそれなりの規模のプロジェクトであることを考えると、行政の担当者が進行役をしていくことは良いのではないかと考える。

その他

- ① 平成17年度からスタートした「子ども夢プロジェクト」には「児童館を拠点に小学1年生から6年生まで幅広い年代の子どもたちが主人公となり、地域の大人、児童館サポーターの中高校生、時には専門家の方にも協力していただきながら、地域を舞台に活動し、自分達の夢を実現していきます」と記されている。
- ② 6月の計画発表会から始まり1月の発表会に向けて、それぞれの児童館が積極的に準備等を進めていくプロジェクトは成熟しているように思える。特に子ども達がプロジェクトに必要な専門的な知識、技術を習得するため、地域の個人、会社にコンタクトし、関わりを持っていることは評価できる。
- ③ 継続してきたものをモデル事業にしたことで新鮮さにはかけるが、最後の発表会の実施方法を変化させていたり、毎年の内容が異なることで、その意味を果たしているのではないだろうか。

プログラム実施児童館の視察報告書

| | | | |
|---------|---------------|--------|---------------|
| 視察児童館 | 大井児童館(岡山県笠岡市) | 視察日 | 平成28年10月1日(土) |
| 視察実施委員等 | 植木委員 北島委員 | 報告書作成者 | 植木委員 |

| | |
|--------|--------------|
| プログラム名 | 移動児童館「てっくてく」 |
|--------|--------------|

視察日に行われたこと

市街地の大井児童館で実施されている遊びのプログラムを児童館のない郊外でも実施するために、郊外でも利用しやすい公民館(神島公民館)を移動児童館の会場にして実施したプログラムである。

視察実施に関する所見

- ① 遊びのプログラムには、体を動かすプログラム、ボードゲームなどの静かに遊ぶプログラム、昔遊びなどのプログラムが部屋毎に配置されていたほか、オリジナルプログラムとして、調理室を活用した「自分でおやつ(白玉団子)を作って食べよう」プログラムなど、子どもたちの主体性な選択と創造性の醸成を意識したプログラムが用意されていた。なお、オリジナルプログラムは、地域組織活動の「井笠の味づくり研究会」の協力を得て実施された。
- ② このように、遠隔地の移動児童館で遊びのプログラムを実施するには、児童厚生員だけでは不可能であり、地域住民による地域組織活動の協力を得ながら児童厚生員とともに遊びのプログラムが展開される必要性が確認された。地域住民と子どもたちとの世代間交流も可能となる。
- ③ 遊びのプログラムの展開には、子どもたちの意見を取り入れるような場面が設定され、次回の移動児童館の内容に活かすしくみとなっていた。

視察実施に関する所見（続き）

- ④ 実施場所の選定については、世帯の比重、人口密度、潜在的なニーズ、利用できる公共施設があるかなどを選定基準として、結果的に、児童館を利用できない郊外の小学校区にある公民館を実施場所として選んでいる。
- ⑤ 他施設の間借を前提とするイベント型ではなく、移動先に児童館機能があることを前提とする施設貸切型として実施されている。
- ⑥ 公民館の休館日を利用することで、普段の児童館で実施している遊びのプログラムをそのまま移動して実施することができている。これは、児童厚生員が適切に遊びのプログラムを活用し展開することができれば、公民館を活用した児童館機能の展開が可能になることを示唆していると考えられる。

児童館に関する所見

- ① 当該児童館は、市の北部に位置しているが、住民からは、南部にも児童館がほしいとの声があった。そのような地域住民ニーズに応えるために実施されたのが、南部の公民館を活用した移動児童館である。
- ② 児童館は地域の子育て支援や健全育成の推進のために必要な児童福祉施設だが、子どもの生活圏に立地していない場合、それ以外の地域への関与ができにくいことが想定される。このような想定を克服しようとする手段の一つが移動児童館である。
- ③ 大井児童館では、移動児童館のアイデアは以前からあったという。ただし、近隣での実施であれば大井児童館を閉館しての実施も差し支えないが、大井児童館を開館しながらなおかつ郊外への移動児童館を実施できるしくみを模索していたという。
- ④ 移動児童館を拠点にして児童厚生員が遊びのプログラムを適切に展開することができれば、児童館のない郊外の地域においても、世代間交流を果たしながら健全育成を進めることができることを示唆するものである。

その他

- ① 移動児童館で丸一日遊んだ子どもたちは、「（移動児童館が）いつもあるといいのに」との感想を述べていた。児童館の増設とともに、遊びのプログラムを児童館のない地域にも届けることのできる環境づくりが必要である。そのためには、定期的な開催が可能で継続性の担保された移動児童館を児童館の役割として規定するような公的なしくみが必要である。
- ② 移動児童館を活用した子育て支援や健全育成を普遍的に展開するためには、地域とのかかわりを意識しながら遊びのプログラムを駆使できる児童厚生員の力量が不可欠である。そのための研修システムが必要である。
- ③ 今後は、モデル児童館だからできるプログラムではなく、いずれの児童館でもできる普遍的なプログラムであることを確認できるエビデンスの構築が必要である。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第9回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成29年2月10日

| | | | |
|-------|---------------------|-----|----------------|
| 視察児童館 | 川口市立芝児童センター(埼玉県川口市) | 視察日 | 平成28年10月16日(日) |
|-------|---------------------|-----|----------------|

| | | | |
|---------|-----------|--------|------|
| 視察実施委員等 | 植木委員 佐野委員 | 報告書作成者 | 佐野委員 |
|---------|-----------|--------|------|

| | |
|--------|----------------|
| プログラム名 | 芝児発 ワールド子どもカフェ |
|--------|----------------|

視察日に行われたこと

9月4日から始まった全7回の「ワールド子どもカフェ」の4回目のプログラム。テーマは「世界の歌を歌って踊ろう」

視察実施に関する所見

- ① ポイントとなる4つの視点を明確にして、それに沿ったプログラム構成が出来ている。
- ② 児童の多文化理解を進めるために、様々な工夫がされている。
- ③ 特に「遊び」を軸としたプログラムとなり、児童館の特性を生かしている。
- ④ ケーブルテレビの取材を入れ効果的な広報活動を行っている。
- ⑤ 半面、プログラムを詰め込みすぎており、ひとつのアクティビティーに深まりがない。
- ⑥ 特にプログラムを展開しながら、歴史や文化を感じられる工夫がほしい。
- ⑦ また、楽器の紹介などにおいては、本物を体験できるよう配慮が必要。
- ⑧ 低学年児童が中心になっているが、今後継続していくことで様々な世代にアプローチできるプログラムとすることが必要。

児童館に関する所見

- ① 外国人利用者が多い割には、英語の表記が少ないなど日常での受け入れ体制が不十分な様子。このように、課題は明確だが、今回の事業と日常の取り組みの関係が見えにくいところがある。
- ② 職員の報告によると今回の参加者は日常的に利用している児童ではなく、このプログラムのために来館する児童が中心のようだ。上記で述べたように、参加者層から見ても日常運営との連動が課題である。
- ③ 指定管理で運営を始め3期目を迎え、地域との連携もしっかりと出来ている。
- ④ 中堅どころの若手職員がプログラムを進めていた。館長はそれを見守る役割であった。プログラムの反省会がどのように行われているのかは、聞き取ることが出来なかった。

その他

- ① 日本で3番目に外国人の居住者が多い川口市ではあるが、外国人住民をまちづくりの担い手として考えにくい傾向にあると市の報告にあり、児童館の近隣地域でもそうした現状を身近に感じているようだ。今回の事業はこうした市全体が抱える課題の解決のために、地域児童館がどう取り組むかを示す良い実践例だと考えられる。
- ② 企画実行委員会は、(公財)ラボ国際交流センター所長をプログラムアドバイザーに迎え、しっかりと運営されている印象である。しかし、しっかりとした組織だけに、児童館職員が、企画委員会のコーディネートを行っているかに疑問が残る。

プログラム実施児童館の視察報告書

社会保障審議会児童部会
第9回遊びのプログラム等に関する専門委員会

資料
2

平成29年2月10日

| | | | |
|-------|------------------|-----|----------------|
| 視察児童館 | 福吉児童センター(鳥取県倉吉市) | 視察日 | 平成28年11月20日(日) |
|-------|------------------|-----|----------------|

| | | | |
|---------|------------|--------|------|
| 視察実施委員等 | 羽崎委員 田口専門官 | 報告書作成者 | 羽崎委員 |
|---------|------------|--------|------|

| | |
|--------|-------------------|
| プログラム名 | それいけアンパンマン&はばたき教室 |
|--------|-------------------|

視察日に行われたこと

「元気づけよう会」

視察実施に関する所見

- ① 当初モデル事業として予定していた「福吉解放文化祭」が倉吉市に大きな被害をもたらした地震のため中止となり、急遽、「元気づけよう会」に変更された。
- ② はばたき人権センターと併設の児童センターであり、地域のコミュニティーとなっているため、集う方々の力を借りて、「大山おこわ」「けんちん汁」を作り、地域住民に振る舞われた。
- ③ 中学生が参加しており、料理の大半は大人の手によるものだったが、地震の影響がまだ見られる地域だけに、住民の方々の積極的な参加はホッとさせられるものであった。
- ④ 子ども達の参加はほとんどなく、高齢者への「元気づけ会」となり、地震の時の報告、反省会も加わり、モデル事業が薄まった感はゆがめられないが、中学生の参加や児童センターが地域とつながりを持っていることは確認できた。次回、12月に予定しているクリスマス会に期待である。

児童館に関する所見

「福吉児童センター」は「はばたき人権センター」と併設しており、地域の高齢者も多く訪れる施設である。最近は中学生の来館も多くなっており、小学生との併用に苦労しているようである。

その他

- ① 鳥取県を襲った大きな地震の被害は倉吉市が甚大で、いまだに屋根にブルーシートをかぶせている建物が多く見られる。
- ② ぎりぎりまで「解放文化祭」を開催していく方向だったが、諸事情で「元気づけ会」と「クリスマス・たこ焼パーティー」に変更された。子ども達の活動に保護者が積極的でない地域事情があるようで、そうした中、解放文化祭には多くが屋台等を出し、児童センターの活動としても歴史があるものからの変更は苦渋の選択だったようだ。
- ③ したがって、変更されたプログラムはモデル事業としての不安はあるが、逆に、普段来館していない中学生が参加していたのは地震と言う出来事を通して地域、高齢者とのつながりを再確認するプログラムになってくれるのではないか。ただ、中学生の参加があっただけに料理作りや地域の方々との触れ合いを積極的に企画運営させてもよかったのではないか。

プログラム実施児童館の視察報告書

| | | | |
|---------|--------------------|--------|----------------|
| 視察児童館 | 石巻市子どもセンター(宮城県石巻市) | 視察日 | 平成28年11月20日(日) |
| 視察実施委員等 | 松田委員 吉村委員 | 報告書作成者 | 吉村委員 |

| | |
|--------|---------|
| プログラム名 | 子ども参加事業 |
|--------|---------|

視察日に行われたこと

- 「3周年イベントに向けての子ども会議・子どもまちづくりクラブ」
- ・1月に行う3周年イベントの実施内容の検討(子ども会議)
 - ・防災、商店街の活性化などをテーマに子ども達が復興に向けたまちづくりについて考える(子どもまちづくりクラブ)

視察実施に関する所見

- ① 東日本大震災後、子ども達から生まれた「まちのためになにかをしたい」の願いを受け、石巻市子どもセンターが完成し、子どもまちづくりクラブが発足、今年で3年目となる。
- ② この日は1月に予定されている「らいつの日003」に向けての子ども会議が実施された。会議前には、中心で頑張っている高校生スタッフが館内案内と事業の説明にあたってくれた。彼女は自らが中心となり、児童館運営や企画に携わっているという自信に満ちていた。
- ③ 会議は、大人スタッフからの問題提起に各々が考えたことを発表していく形で進んでいった。子ども達の意見をひとつずつボードに張り、参加者の人すべてが共有できるようメモを貼り付けて、アクティブ・ラーニングの方法で意見が盛んに交わされていた。

視察実施に関する所見（続き）

- ④ 子ども達の根底には、自分たちが運営している児童館を「また来ようと思うところにしよう」「来た人が参加でき楽しめる内容を考えたい」「感謝の気持ちが伝わる企画をしたい」など子どもたちの強い思いが、活発な意見交換からうかがえ、今だけで終わる企画ではなく、長期的な児童健全育成につながるすばらしい企画だと感じた。

児童館に関する所見

- ① 児童館職員が常に温かく子ども達を見守っている様子が伺えた。
- ② 会議中もさりげない言葉がけをし、決して、強制することなく意見を引き出し、参加した子ども達一人一人の発言の機会を大切に、前向きに事業に取り組んでいけるよう辛抱強く受け止めていると感じた。
- ③ 先生による一方的な企画形式ではなく子ども達が子ども達の手で学び育成していくことをサポートすることは、とても辛抱強く大変なことだと感じた。
- ④ 「生きる」「育つ」「守られる」「参加する」を柱に子ども達をそして街を元気にしていこうという強い思いが、震災の街からの発信として強く感じられた。本当の意味の子ども主流型プロジェクトであった。

その他

- ① 地域と児童館が連携して、街と未来を担う子ども達のために一つになっている様子が伺えた。また、そのことで、携わったすべての人が活気を持ち笑顔あふれる街として生まれ変わろうとしているようにも感じた。
- ② 子ども達の新しい感性で商店街マップを作ったり、商店街の協力でハロウィンイベントを行ったりと、児童館の周りではみんなが前を向きで、自分のできることを考え、自由に意見を交換できる場となっているように感じた。震災という大変な体験を共有した強さを改めて感じ、応援したくなった。

プログラム実施児童館の視察報告書

視察児童館 川口市立戸塚児童センターあすぱる(埼玉県川口市)

視察日 平成28年12月3日(土)

視察実施委員等 佐野委員 大倉係長

報告書作成者 佐野委員

プログラム名 子どもエコ忍者学校

視察日に行われたこと

子どもエコ忍者学校を終えての子ども達の発表と修了式

視察実施に関する所見

- ① エコと忍者を結びつけることで、エコに興味のない子も環境プログラムに取り組むきっかけを作ったようだ。児童館の特性を生かした事業だと考える。
- ② 地域の協力者が大変多くかかわっている。またそれぞれの持ち味を生かしたコーディネートを行っているため、協力者の方々が生き生きと活動しているのが印象的であった。
- ③ 忍者学校のプログラムには、ツリークライミング、竹を使った船等、通常ではなかなか体験できないコンテンツがあり、遊びを軸としながらも、幅広い環境教育プログラムになっていると考えられる。
- ④ 地域の自然を愛することは子どものふるさと意識を醸成することで、これが環境教育の原点と考えていた。「子どものふるさと意識の醸成」は児童健全育成事業の重要な目的でもあるので、効果的な事業連動と考えられる。

視察実施に関する所見（続き）

- ⑤ しかし、子どもの参画性の視点からみると、多少取組の弱さが伺える。地域の協力者の方々が意欲的に取り組んだが、それが子どもの参画性を奪ってしまった可能性もある。子どもを中心に置きながら、地域に協力者との協働関係を結ぶコーディネーターが課題である。
- ⑥ また、グループ活動は行っているが、継続的にグループを支援するワーカーが存在していないようだった。大学生などボランティアの力を活用し、子どもがグループ活動を通して成長できるような取組がほしかった。

児童館に関する所見

今回の参加者は日常的に利用している児童ではなく、このプログラムのために来館する児童が中心のようだ。参加者層から見ても日常運営との連動が課題である。